むかし「局アナ」いま「隠居」

御不浄

上田 博章(絵・文)

1933年徳島市生まれ 大阪府在住

■京都大学農学部林学科卒業
■元朝日放送アナウンサー
■元池田マルチメディア代表取締役
■講演、朗読指導など以外は隠居中

一九四〇年(昭和15年)の四月、私は徳島駅前の寺島尋常小学校に入学しました。

入学式で校長先生は、「君たちは、皇太子殿下と同い年であります。殿下に負けないように、しっかり勉強してください」

校長先生の言葉で記憶に残っているのは、これだけですが、このとき、「皇太子殿下に 勝ってもエエんかいな?」

と思ったことを なぜか今でも覚えています。

入学して間もなく、私は東京渋谷区の千駄ヶ谷第二小学校に転校しました。

代々木駅の近くにあったこの学校は、殺風景ながら妙に都会的な学校で、徳島とは ずいぶん違うのです。

先ず驚いたのは、校庭が狭く、アスファルト張りで、転ぶと痛いだけでなく骨に響きました。

次に驚いたのは 授業中、オシッコがしたくなると、男の子も女の子も、「先生、御不浄(ごふじょう)に行ってもいいですか?」

と叫ぶのです。

小学校一年生だった私が「御不浄」なんていう言葉を知るわけありません。

「さすが 東京じゃなあ」

カルチャーショックと、ちょっとした緊張を覚えたものでした。

今なら さしずめ、「先生[トイレ]に行ってもいいですか」

と言うところでしょうが、戦前は英語を敵性語として排斥(はいせき)していたこともあって「トイレット」とか「トイレ」などという便利で垢抜けた言葉がないので、生徒達は、「先生、おシッコ…」「先生、お便所…」

…だったと思うのですが、これでは お行儀が悪いと先生は、思ったのでしょう。

それにしても学習院じゃあるまいし、公立の小学校一年生に「御不浄」なんて言わせるのもねえ…。

＊

敗戦後も暫くは「便所」や、「お便所」が 日常語としてまかり通っていました。

ですから女の子の会話で、「お便所がしたい」「お便所する」

という言い方を 何度も耳にしたことがあります。

しかし便所という言葉はズバリ、排泄物を意味する「便」という文字が付いていることから、嫌がる人が多かったのでしょう。

今や、「トイレ」は立派な日本語となっています。

＊

私が小学校低学年の頃は、学校でも「寝小便」が話題になっていました。

「汽車」という文部省唱歌は若い方もご存知でしょう。

「♪ 今は山なか 今は浜〜」

…という あの歌です。

その替え歌が、小学校でこう歌われていました。

♪

今は夜中の三時ごろ
「便所」と寝床を間違えて
あっというまに寝小便〜

一九四〇年代の替え歌に使われていたのも、やはり「便所」だったのです。

私の場合、学校の便所でスズメと並んでオシッコをした…それは夢だったのが小学校二年生、人生最後の寝小便となりました。

一九四八年(昭和23)の秋、「おい、大工さんが 女便所作んりょるぞ!」

旧制 徳島中学三年生の私は こう言われて、「あ、もうすぐ男女共学か…。来るもんが来たなあ」

何だか、嫌な感じでした。

かねてから耳にしていた教育改革が、来年に迫り、せっかく 試験に合格して、機嫌よく通った徳島中学が空中分解し、友達の多くを失ってしまう日が近づいてきたのです。

女子トイレを作る槌音は、男女共学を私たちに告げる予鈴でした。

そして、**旧制** 徳島中学は、「女の先生も女性事務員もいない 男だらけの中学校」であった…という事実を在校生の私に教えてくれたのは「便所」だったのです。

私がかねてから尊敬している作家　向田邦子さんの仕事仲間、久世光彦さんの随筆集、『触れもせで』に、こんな記述がありました。

トイレを意味する日本語は随分ある。古くは「吾輩は猫」の、後架、雪隠から、厠、手洗い、便所に　御不浄…、ややこしいようだが、これが日本語のいいところだと私は　思っている。何れも少しずつニュアンスが違う。向田さんはといえば大抵は気取って「御不浄」と言っていた。ときに　例えば小走りに　駆け込むような場合、「お便所」と言っていた。そんな使い分けが面白い人だった。普通　便所と言えば何となく　発音も汚らしく思えて、特に　女の人は避けたがる言葉であっても向田さんが使うと、追い詰められたおかしさが、なんとも可愛くて、これも人柄かと感心したものである」

　この久世さんの一文で、トイレを意味する日本語はほぼ網羅されています。

　ところが、デパートなど対面販売や食事提供の店は、接客中に尿意を催したとき「トイレ」に代わる隠語…というか一種の業界用語を使用してきました。

　店によって異なりますが「ちょっと「三番」に行きますのでよろしく」

　と　番号を使う職場とか、「お花摘み」「雉撃ち」「遠方」「紫」「伊勢」「当たり」「横浜」と　様々で、それぞれ語源や謂れがあるそうで…例えば、「横浜」の語源は、横浜市の電話**局番**「〇四五」から来たという説を　聞いたことがありますが、横浜市民からすると聊か気分が悪いかもしれませんな。

　また「当たり」を使っている店があるそうですが、ならば「大当たり」と来れば「**大**便」を意味するかどうか、そこまでは　ちょっと…。

＊

　ヒマにまかせてテレビのチャンネルを変えていたら戦時中の女学生のシーンが現れました。

　日の丸の鉢巻きを締め、モンペを穿いた女学生達が、兵隊さんの指揮で凛々しく立ち働いている場面です。

　確か「日蓮の遺産」という映画でした。

　私より、二～三歳年長の世代は、学童疎開ではなく動員されて軍隊調の生活を強いられていたのです。

　映画の場面は…森の中で作業中の女学生が集合し、二列横隊に　整列したあと気合の篭った将校の号令が響きわたりました。

「右へ－倣えッ。気を付けッ。番号!!」

「イチ」「ニッ」「サン」「**ヨン**」…もと　少国民だった私はここでズッこけたのです。

「**ヨン**はないだろう**ヨン**は」

　自衛隊だって　そうだと思いますが「四」は「シ」だし、「七」は「シチ」でした。

「ヨン」や「ナナ」では私如き老人は、チャンバラ映画に「スマホ」が出てきたような気がします。

　やがて映画ではモンペに鉢巻姿の女学生が登場し、「**トイレ**の掃除を…」

　というセリフを発するに及んで、もう　そこから先は観ていません。

＊

「先生、御不浄に行ってもいいですか?」

　と言わされていた東京の小学校の同級生、三好君が、仙台支社長に栄転し、単身赴任したのは、もう30年も前のことになります。

　独り暮らしの経験がない中年男の彼が、単身赴任でちゃんと暮らしているか?…私が仙台へ出張したとき、様子を見に行ったことがありました。

　生まれて初めて「海鞘」を御馳走になった　その晩は、話が弾んで　泊めてもらうことになったのです。

　支社長の社宅は　2Kの結構なマンションなので、私たちは別々の部屋で寝ていましたが、夜中に尿意を催した私は手探りで何とかトイレに辿り着き、ドアを開けると　暗がりのなかに、私の苦手な男女共用便器が見えました。

　マンションならどこでもそうですが、今や一般家庭からも、男子用便器が姿を消し、倅の家も、娘の家もトイレが二つずつあるのに男子用便器がありません。

　立って用を足した世代の私は最初の一撃を男女共用便器に　命中させる自信がないので、他所さまの家はもちろん、子供達の家でも、御不浄での粗相がないよう不本意ながら　座って放尿しておりました。

　この仙台の夜もパンツを下げ、便座に腰を下ろしたのですが、…何と、便座がないのです。

　私の尻は便器の中に嵌り、水に浸かっていました。

＊

　単身赴任だった三好君は、一日に一回、つまり　大便のときだけ　便座を使うので、それ以外は、便座を上げてあったのです。

　仙台の海鞘が初体験なら、便器の中に尻から墜落したのも、初めての経験でした。